

残留隊始末記

福岡県 徳 永 政 人

私は大正十二（一九二三）年二月二十五日、福岡県山門郡山川町大字原町に生まれました。家は農家で米とみかんの栽培でした。家族は両親と女五人男四人でした。

長男は三十二で私の出征前に死にました。次男も幼くして死に、三男は海軍水兵としてサイパン玉砕で戦死、私は四男です。五男は佐世保の海兵団に入り人間魚雷で出撃直前に終戦となり助かって生還しました。

長女は現在九十六歳で健在です。私のすぐ上の姉は幼いころ、馬に蹴られて死にました。

学校は山川南部尋常高等小学校卒業です。兵隊検査は甲種合格でした。そして昭和十九（一九四四）年三月十日、久留米の歩兵第四十八連隊に入隊しました。当時は甲種合格になる若者が少な

ったので検査官の「甲種合格」の言葉に、どれだけよることか分かりませんでした。同輩、近所にも鼻高々で大変名誉なことでありました。当時の日本青年は軍隊に入って国のために尽くせることを最高の名誉と考えておりました。

昭和十九年三月十日、近所の人達に送られ久留米の第十二師団歩兵第四十八連隊に入営しました。満州要員と決まっていました。そして二週間後、満州へ向け博多港より輸送船に乗り出発、朝鮮釜山港に上陸しました。

内地と異なる風物に珍しさを感じながら朝鮮半島を北上し、鴨緑江を渡り満州国の広大な風景に眼を輝かせながらソ連国境に近い東寧の近くの成子溝に駐屯する満州第三〇六部隊（歩兵第四十八連隊）に到着しました。

満州では部隊名は固有名称は使わず、すべて匿名を使うことになっていました。

当時は南方の戦局がきびしく、在満部隊も続々南方へ援軍として転進するようになり、我が部隊

も毎日が軍事教練の明け暮れでした。

渡満以来六カ月の訓練もようやく終わり、一期の検閲が第五軍司令官山下奉文閣下の臨席のもと行われ、無事終了しました。

黄河原^{コウカバル}の演習が終了直後、部隊は南方転出となり、一部の者を残して南方（台湾）へ出発しました。私は不幸か満州に残されましたが、間もなく落下傘部隊に転属させられ、九江で後方攪乱訓練（飛行機で敵の後方に降り、夜敵中に突入し撃退する）を受けました。

冬期には落下傘で雪の上に降下し、白い敷布をかぶり、積雪一メートル以上もある所を、雪をかき分けかき分け、敵に気付かれないように前進するというような訓練の繰り返しで大変な重労働でした。

その後、吉林に移転し、私は伝書使の仕事に付きました。班長と二人で馬車（マーチョ）に揺られ、郵便物を受領に吉林市内に行くのが日課でした。部隊へ帰れば郵便物を区分し、各部隊から受

領にくるのを待つていけばよいので大変楽になりました。

しかし、そういう仕事も束の間のこと、部隊もソ連との戦争準備に入ることになり「豊焼」の山奥に陣地構築の分散作業のために出発しました。私は新たに作られた野戦貨物廠勤務に回され「豊焼」の駅に荷物の配分のために勤務することになりました。班長以下十六人はソ連侵入開戦のため陣地に引き揚げるよう命令が下りました。しかし本部の方から金庫を持って後藤班長が囃^{トモン}們まで付いて行くことになりました。

昼間は敵に見つけられると困るので夜間のみ行動することになりました。ところが闇夜ですから手探り状態でなかなか進むことが出来ませんでした。道路は危険があるため鉄道線路を進行中、前方に黒い人影が見えたので、サッと一同が地に伏せたところが相手はソ連兵の歩哨だったのでした。自動小銃で「ダダダッ」と射ってきました。

こちらは三八式歩兵銃で応戦しようとしたので

すが、残念なことに弾丸が一発も無く「それ逃げろ！」と逃げましたが、一方は山、一方は道路です。そこには戦車隊や歩兵部隊が駐屯していたようにメチャクチャ射ってきました。私は一目散に山へかけ登り命だけは助かりました。

山の上の安全な場所まで登り他の戦友の来るのを待ちましたが十六人中私を入れて三人だけがありました。他の戦友がどうなったか、どうとう会うことはありませんでした。

翌朝、凶們に向け山中を進みました。そこで食物を探しに部落に寄ったところが、既に農民は暴徒と化し日本兵を捕えんとしていました。部落を避け南進中、とうとう鮮満系の保安隊に捕えられてしまいました。

既に戦争は終わっていたのでした。捕えられてから二日後、ソ連軍に引き渡され、日本軍が抑留され集合している所に収容されました。そこには多数の日本人が収容されていました。

昭和二十年十月、作業大隊が編成され、千五百

人単位で列車に乗せられ、日本へ帰るとだまされシベリア奥地に送られ、強制労働と食糧難に苦しみながら、生命永らえて昭和二十三年十一月二十三日、故国舞鶴の港に「信濃丸」で、千九百六十一人の復員兵の一員として帰り着きました。

なつかしの我が家には両親が健在でした。我が子の無事な姿を見て涙を流して迎えてくれました。しばらくしてサイパンで戦死した兄（三男）の嫁さんと結婚し、現在幸せに暮しております。

シベリアに抑留されている間は、シベリア鉄道の複線になるバム鉄道（枕木一本に日本兵一人が死んでいるといわれている）の敷設作業や森林伐採、学校建築、製材工場、煉瓦工場等々や農場作業もやらせられました。

南方進出部隊から残された関東軍の残留は、新編師団に転属させられ、ソ連参戦で敗戦となり、逃亡生活の末、抑留され、シベリアでの強制労働と食糧難に苦しめられました。

転居先の部隊名は分かりません。